

田中 響 氏の学位論文審査の要旨

論文題目

若年性アルツハイマー病における精神症状と認知症重症度との関連
(Relationship between neuropsychiatric symptoms and dementia severity in early-onset Alzheimer's disease)

認知症に伴う精神・行動症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia; BPSD) は、認知症の背景疾患によりその特徴が異なることが知られているが、認知症の重症度にも影響を受けることが知られている。しかしながら若年性アルツハイマー病 (early-onset Alzheimer's disease; EOAD) においては、患者そのものの数が少ないこと、また病院ベースでは認知症重症度が軽症の患者に偏ることなどから、認知症の進行に伴う BPSD の変化については明らかにされていない。

本研究では、病院ベーススタディに訪問ベーススタディを加えることで、幅広い重症度の EOAD における BPSD と認知症重症度の関連を検討した。

研究対象は Kumamoto University Dementia Follow-up Registry から選択された EOAD 患者 63 名と、若年性認知症全県調査から選択された 29 名である。Clinical Dementia Rating (CDR) を用いて軽症群 (CDR 0.5-1, n = 55)、中等症群 (CDR 2, n = 17) および重症群 (CDR 3, n = 20) の 3 群に分け、BPSD を Neuropsychiatric Inventory (NPI) によって評価した。その結果、NPI 下位項目では、興奮、多幸、アパシー、脱抑制、易刺激性および異常行動の項目で認知症の悪化に伴いスコアは有意に増加した。幻覚は軽症群と比較し中等症群でスコアが高かった。妄想、うつ、不安は 3 群間において統計学的な有意差は認められなかった。興奮、アパシー、脱抑制、易刺激性および異常行動は認知症の進行に伴い悪化するパターンをとり、晩発性アルツハイマー病患者と似たパターンを呈した。一方で幻覚、うつは EOAD 患者において特有のパターンを示していた。

審査において、NPI の評価法に対する信頼性、65 歳にて若年性、晩発性と分けることの正当性、精神症状に対する薬物療法の影響、EOAD において幻覚、うつが晩発性とは異なるパターンを示すことの病理学的裏付けなど、様々な質疑応答がなされ、申請者からは概ね適切な回答が得られた。

本研究は 若年発症のアルツハイマー病患者の治療やケアにおいて患者家族そして医療・介護従事者にとって重要な情報を提供したもので、学位の授与に値すると判断した。

審査委員長 脳神経外科学担当教授

倉津 純一